2022年3月27日 川越教会

丸山　勉

恐れずに行け

［マルコによる福音書14章27～31節、66～72節]

イエスは弟子たちに言われた。  
「あなたがたは皆わたしにつまずく。『わたしは羊飼いを打つ。すると、羊は散ってしまう』と書いてあるからだ。しかし、わたしは復活した後、あなたがたより先にガリラヤへ行く。」するとペトロが、「たとえ、みんながつまずいても、わたしはつまずきません」と言った。イエスは言われた。「はっきり言っておくが、あなたは、今日、今夜、鶏が二度鳴く前に、三度わたしのことを知らないと言うだろう。」ペトロは力を込めて言い張った。「たとえ、御一緒に死なねばならなくなっても、あなたのことを知らないなどとは決して申しません。」皆の者も同じように言った。

ペトロが下の中庭にいたとき、大祭司に仕える女中の一人が来て、ペトロが火にあたっているのを目にすると、じっと見つめて言った。「あなたも、あのナザレのイエスと一緒にいた。」しかし、ペトロは打ち消して、「あなたが何のことを言っているのか、わたしには分からないし、見当もつかない」と言った。そして、出口の方へ出て行くと、鶏が鳴いた。女中はペトロを見て、周りの人々に、「この人は、あの人たちの仲間です」とまた言いだした。ペトロは、再び打ち消した。しばらくして、今度は、居合わせた人々がペトロに言った。「確かに、お前はあの連中の仲間だ。ガリラヤの者だから。」すると、ペトロは呪いの言葉さえ口にしながら、「あなたがたの言っているそんな人は知らない」と誓い始めた。するとすぐ、鶏が再び鳴いた。ペトロは、「鶏が二度鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言うだろう」とイエスが言われた言葉を思い出して、いきなり泣きだした。

[１]　「ペトロ」と「教会」

ペトロという人物については聖書は色々に記述してくれていますね。必ずしも「立派な信仰者」とは言えないかも知れませんけれども、聖書で彼の存在感は際立っています。今日の箇所もそうですけれども「人間ペトロ」が伝わってきて、「私もペトロのような者だ」と共感を覚えることが多いのではないでしょうか。。

皆さんは旅行された方があるかどうか分かりませんが、ローマのバチカン市国に「サン・ピエトロ大聖堂」というとても大きな教会がありますが、「サン・ピエトロ」とは「聖ペトロ」のことですね。ここでペトロが迫害を受け、最期を迎えたとされ、カトリック教会の「初代教皇」はこのペトロであると捉え、それを記念する教会を造りました。この教会の前の広場には教皇が選ばれる時などは沢山の人が集まりますし、巡礼する人々は後を絶ちません。私も少し興味がありますね。D・ボンヘッファーというドイツの牧師・神学者が、まだ神学校を出たばかりの若い時にローマを訪れ、これまでプロテスタントの小さな教会を多く見て来た彼が圧倒されたのですね。規模が大きいだけでなく、「キリストの教会」とは、本来スケールの大きなものなのだ、ある意味神の国の地上の現れなのだと、彼の教会論のベースにもなったというような話を聞いたことがあります。サン・ピエトロ大聖堂も、もしもペトロ自身を奉っているのならそれは違うと思いますが、そこでは神の大きさ、キリストの大きさというものを意識して建造されているのだろうと思います。私たちを覆い、包み込むようなキリストの恵みが大きいのです。

［２］ 泣けたペトロの幸い

しかし、今日の箇所です。この場面ではいかにも「かっこ悪い」ペトロの姿がここにはあります。イエス様の前に大見得を切ったペトロでしたが、こともあろうにイエス様が予告された通りにイエス様を裏切ってしまったペトロです。皆さんが何度も読んだり聞いたりしている、このレント・受難節では欠かすことが出来ないエピソードです。

ここで私たちはどんなことを感じるでしょうか。特に最後の「いきなり泣き出した」（他の訳では「外に出て激しく泣いた」ともある）という所に、まるでドラマや映画のように目の前に描き出されるペトロの姿に自分も胸が痛くなるということがあると思います。肝心要の所で、自分可愛さで逃げてしまう。これは例えばイエス様相手でなくとも、色々な人間関係の中で結局は自分を選んでしまうと言いましょうか、ああ、そんなことが自分の中にもあるなぁと、「ペトロの弱さ」と「自分の弱さ」とが触れ合ってくるという、そんなことがあると思います。これも確かに聖書の読み方の一つですね。文学や芸術の題材ともよくなっていることでもあります。けれども、私は今回改めてこの箇所を味わっていて、ああ、決してそれだけのことを聖書は言っているのではないな、と思いました。

ここで私たちが不思議に思うことがあると思います。それはイエス様はなぜわざわざペトロに、「はっきり言っておくが、あなたは、今日、今夜、鶏が二度鳴く前に、三度わたしのことを知らないと言うだろう」と事前に言われたのか、ということです。少し意地悪な感じもしないでしょうか。もしも急に「あなたは、今夜私を裏切るよ」などと言われたら、「あ、この人、私のことを信用してくれていないな。私のこと嫌いなのかな」とちょっと嫌な気持ちになると思います。これ、心の中を見透かされたということではないと思うのです。彼はこの時自分ではイエス様を裏切るつもりなどさらさらなかったと思うのです。この点が大事だと思います。自分では自分のこと、分からないのです。ですからちょっとカチンときて「あなたはこれからのことを予告するけれども、何でそんな事言うの？私のことは私が一番よく分っていますよ」と思って、むしろ私は大丈夫だと言わんばかりに、「ご一緒に死なねばならなくなってもあなたを知らないなどとは決して申しません」と言い切りました。この時彼はイエス様の真意は皆目分からなかったと思います。

それが分かる時がやってみました。それは彼の高揚した思いや自信が木っ端微塵に崩された時でした。第一回目に「わたしはその人（イエス）を知らない」と言った時に、鶏が鳴きました。そしてペトロが三度目に「その人は知らない」と言った時に、また鶏が鳴きました。二回目の鳴き声です。夜が明けようとしていた訳です。聖書はこう書いています。「ペトロは、「鶏が二度鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言うだろう」とイエスが言われた言葉を思い出して、いきなり泣きだした。」―イエス様の言葉の通りになってしまった。…この時彼が泣いたのは、不甲斐ない自分の姿が惨めで、それで泣いたのでしょうか？聖書はそれを説明してはいません。色々な捉え方があると思います。だだ、私は惨めな自分、罪深い自分に涙したと言うよりも「イエスが言われた言葉を思い出して」という所、それを聖書は言いたいのではないかと思いました。ひと言で言えば、「イエスは、わたしのことを知り抜いておられる。わたし以上にわたしのことを知っておられる。そしてそのわたしのことを捨てないで気にかけていて下さる」という事実が分かったのです。それは自分の力ではなく、まして自分の信仰の立派さでもなく、「イエス様のことば」が迫ってくることによってです！彼はここで泣けて良かったと思います。「自分」を固く守っている者はなかなか泣けないと思います。自分が守っていた城が崩れて、それでもなお自分の美学を守ろうとする者は城もろとも消えてしまう恐れもあると思います。人間の強がりは、自分を滅ぼすこともある。けれども自分に語られた「イエスの言葉」を思い起こす人は、イエスの愛を感じて涙することが出来ることが出来るのではないでしょうか。そして、その時は「夜明け」なのです。暗闇から朝に移る時、つまり鶏が鳴く時なのです。

［３］ わたしはあなたの神だから

ですからイエス様は決して意地悪ではないと思います。人の心の醜さを抉って、それを見ながら生きよ、と言っているのではないと思います。しかし、週報にも書きましたけれども「イエス様が好きです。あなたについて行きます」という、己の決心だけでは信仰生活は続けられないと思います。イエス様は、私たちの人生の隠された心の部分をなあなあで済ませない、見て見ないふりはしないののですね。「あなたは深く心が傷つくことがあるだろう。自分に愛想をつかす時もあるだろう。ドン底と思えるような時が訪れることもあるだろう。でも、わたしはあなたの全ての「時」を知っているよ。これから起こることも知っているよ。何故なら私はあなたの神だから。あなたと共に歩くために私はこの地上に来たのだよ。あなたは自分の小ささ、自分の罪に怯えることがあるかも知れないが、恐れないで生きて行って欲しい。私はあなたを本当に愛している。今は分からなくても良い。地上では完全に分からなくても良い。でもあなたのためにわたしが命を献げるほどにあなたのことを愛し、見捨てないことは信じて欲しい」と、そのようにおしゃっているように思えてなりません。

今日一緒にお読みした有名な詩編23編は、どこまでも神様が私たちの羊飼いとして、「羊」である私たちの責任を取って下さるという約束の詩ですよね。ここには羊飼いの覚悟と言いますか、命が裏打ちされていると思います。その最後に何とありましたか。「恵みといつくしみはいつもわたしを追う」とありました。今日、この言葉を心に刻みたいと思います。イエス様は、ペトロを追った、追いかけたんだと思います。ペトロの最期は、ネロの迫害下殉教したと伝えられていますが、その死の時であってもあなたを「追って」離さないよと。私たちのどんな体験もイエス様の手や足が届かない事柄はない。独りぼっちの部屋であろうが、病室であろうが、無人島であろうが、喧騒の中であろうが、イエス様は「わたしを追う」。

今日は3月最後の主の日でした。今年度もイエス様は私たち一人ひとりの人生を「追って」来て下さいました。‟追体験”して下さいました。主の知らぬ試練は何一つないのです。「いずこにも御足の跡あり」です。だから「エイエイオー！」ではなく、強がらないで、でも地道に礼拝を大切にしながら新しい年度も一歩づつ一歩づつ歩んで行きたいと思うのです。私たちの信仰の強さなど、たかが知れているのです。大きいのは神様の愛、イエス様の恵みの力です。それは、サン・ピエトロ大聖堂の大きさよりもずっとずっと大きいものです。そしてその力は、どん底から私たちを支え、赦し、生かして下さいます。この方を見上げながら、恐れずにそれぞれの人生、また私たちの教会の歩みも、前へと進ませて頂きたいと思います。お祈り致します。

愛する神様、この一年間の私たちの歩み、教会の歩みを支え、導き、また憐れみ、赦して下さり、導いて下さいましたことを感謝致します。私たち一人ひとりがペトロです。どうか「自分の信仰」に立脚するのではなく、私を知り尽くして下さるイエス様の大きな愛の中に、落ち着いて、信頼して歩んで行くことが出来ますように。今、様々な試練の中にあるお一人お一人を格別愛し、あなたが共にいて下さいますように。主イエス様の御名によって祈ります。アーメン。